SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

日本とスウエーデン音楽交流プロジェクト2009：音楽演奏・音楽療法による継続的青少年育成プログラム

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部 公開日: 2013-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小西, 潤子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7184

日本とスウェーデン音楽交流プロジェクト2009

―音楽演奏・音楽療法による継続的青少年育成プログラム―

音楽教育講座　小西　潤子

はじめに

本プロジェクト（略称PSJM2009）は、2008年7月に日瑞音楽留学基金（加勢園子理事長、スウェーデン在住）が小西潤子（静岡大学）、土野研治（日本大学）らに呼びかけ、定期的に日瑞の音楽専門家と学生が両国を訪れ交流することによって、相互の音楽文化に関する知識を深め、専門分野における能力を高めることをめざして立ち上げたものである。そもそものきっかけは、平成16年度音楽教育講座卒業生・高松要がスウェーデン留学に際して、日瑞音楽留学基金のお世話になったことであった。当初、加勢理事長からの依頼は、2009年7月に別の目的で来静するスウェーデンのヴァイオリニストの演奏会を静岡大学内で開催することへの協力要請であった。日本では北欧に対する漠然とした憧れが持たれているが、具体的な北欧文化が紹介される機会はそれほど多くはない。特に音楽に関しては、フィンランドの作曲家・ジャン・シベリウスの真苗が知られる程度に過ぎない。これまで、音楽教育講座としては姉妹校のネブラスカ大学オマハ校との交流を行ってきたり、オーストラリアから音楽学研究者を招聘した経緯はあるが、ヨーロッパとの交流は行ってこなかった。そこで、学生に北欧の音楽を紹介するよい機会だと考え、本プロジェクトに加わることにした。本稿では、プロジェクト全体の概要を述べた上で、静岡大学での演奏・講演について報告する。

1．PSJM2009の経緯

1．1　目的

スウェーデンでは文化相対主義に則った音楽教育が実践されており、総合大学にも西洋伝統芸術音楽はもちろんジャズやロック、民俗音楽などあらゆるジャンルが学べる音楽家養成コースやFMT音楽療法士の本格的養成コースが設置されている。また、子どもから熟年者まで開かれた音楽生涯学習教育システムもある。こうしたユニークな制度や同国出身の優れた音楽家について、これまでわが国で紹介される機会がほとんどなかった。一方、スウェーデン側には日本伝統文化への憧憬があるが、日本の教育機関等との直接的なルートがなかった。こうしたことから、継続的青少年育成のための音楽演奏・音楽療法による交流の第一歩として、PSJM2009を実施することにした。その骨子は次の通りである。

（1）（基本的に隔年）スウェーデンの音楽専門家と学生が日本を訪問する。日本側は1週間ほどの演奏会やセミナー、マスターコース、研修などのプログラムを組む。日本への渡航費はスウェーデン側が負担し、日本国内の費用（会場費やプログラム内の

移動の交通費、宿泊費）は、日本側が負担する。

（2）（基本的に隔年）日本の指導者と学生数人がスウェーデンを訪問し、1週間ほど演奏会や、セミナー、マスターコース、研修などのプログラムに参加する。スウェーデンへの渡航費は日本側が負担し、スウェーデン国内の費用（プログラム内の移動の交通費と宿泊費）は、スウェーデン側が負担する。

（3）日瑞音楽留学基金は、日本側とスウェーデン側の意思疎通とプロジェクト遂行のコーディネートをする。当面、日本側の事務局長は小西潤子（静岡大学）とする。

そして、2009 年度スウェーデン側の日本国内の費用の一部として、スカンジナビア・ニッポン・ササカワ財団より助成を受け（No. 09-20）、協賛事業とした。また、静岡大学からは国際交流センターの助成を受け、演奏会、講演会を教育学部および人文学部地域社会文化研究ネットワークセンターの主催事業とし、大学会館で学外へも公開して実施した。

1．2　事業概要

PSJM2009 全体としては、2009 年 7 月 1 日から 30 日にかけて実施された。静岡大学での公演はそのオープニングにあたるのだが、スウェーデンからの若手ヴァイオリニストとピアニストを招いてコンサートは静岡大学のほか神戸市、西宮市、同演奏家と明石フィルハーモニー管弦楽団との共演を明石市で実施した。また、音楽療法専門家による講演「ＦＭＴ音楽療法」を静岡大学、明石市、神戸市、西宮市、日本大学芸術学部の各所で、スウェーデン音楽学校の学生による演奏会や静岡大学学生による日本音楽紹介と音楽交流、静岡県オーケストラスクールとの共演（静岡市）などを実施した。その結果、日瑞双方の青少年のための音楽学習と交流との場を提供し、同時にその成果を公共の場で発信することができ、各方面より大きな反響を得た。また、日瑞関係者の信頼関係を築くことができ、プロジェクトの進展に向けて議論した。

具体的な行程は、次のとおりである。

7 月 1 日（水）　ストックホルム→成田経由→静岡到着（ティチアーティ、ヤコブス、グランベルイ）。演奏会等打ち合わせを行う。

7 月 2 日（木）　フーゴ・ティチアーティ・ヴァイオリン・リサイタル（伴奏：マリアンヌ・ヤコブス）、アニータ・グランベルイ「ＦＭＴ音楽療法」講演会、静岡大学大学院教育学研究科音楽教育専攻生との和楽器（箏、三味線）を使っての音楽的コミュニケーション・タイム（いずれも静岡大学大学会館ホール［静岡市］）。

7 月 3 日（金）　静岡市→神戸市移動（ティチアーティ、ヤコブス、グランベルイ）。演奏会等打ち合わせを行う。

7 月 4 日（土）　講演会とミニコンサート「北欧スウェーデンの音楽と音楽療法」。講演：「北欧スウェーデンの音楽文化」　加勢園子（日瑞音楽留学基金理事長）、ミ

ニコンサート：「白夜の国の調べ―スウェーデン・ヴァイオリン音楽の魅力」フーゴ・チィチアーティ（伴奏：マリアンヌ・ヤコブス）、講演：アニータ・グランベルイ「ＦＭＴ音楽療法について」（いずれも明石市生涯学習センター）。

7月5日（日）　明石フィルハーモニー管弦楽団特別演奏会　「白夜の国の万華鏡―北欧音楽の魅力―（ヴァイオリン:フーゴ・チィチアーティ、ピアノ伴奏：マリアンヌ・ヤコブス）、《F. メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲ホ短調 Op. 64》（ヴァイオリン独奏：フーゴ・チィチアーティ）（いずれも明石市民会館大ホール）。

7月6日（月）　スウェーデンの音楽療法と音楽　「スウェーデンの音楽文化とＦＭＴ音楽療法」　加勢園子、アニータ・グランベルイ　「北欧スウェーデンの音楽」フーゴ・チィチアーティ（伴奏：マリアンヌ・ヤコブス）（いずれも西宮市プレラホール）。

7月7日（火）　スウェーデンＦＭＴ音楽療法と癒しのコンサート　講演：加勢園子、アニータ・グランベルイ　コンサート：フーゴ・チィチアーティ（伴奏：マリアンヌ・ヤコブス）（舞子ビラあじさいホール［神戸市］）

7月8日（水）　明石市→東京　第133回日本財団ランチタイムコンサート「スウェーデン白夜の国の万華鏡」フーゴ・チィチアーティ（伴奏：マリアンヌ・ヤコブス）（日本財団バウ・ルーム［東京都］）。

7月9日（木）　日本大学芸術学部特別講義１：音楽療法、同２：芸術療法（日本大学芸術大学江古田校舎大ホールほか）。

7月28日（火）　スウェーデン交流コンサート　静岡県オーケストラスクールとストックホルム音楽院学生からなるスパークスの演奏会（あざれあ大ホール［静岡市］）。

２．静岡大学での公演

２．１　フーゴ・ティッチアーティ　ヴァイオリン・リサイタル

フーゴ・ティッチアーティ TICCIATI, Hugo 氏はスウェーデン・ストックホルムの音楽家養成校リラ・アカデミアでヴァイオリン演奏、即興演奏、音楽史を教授し、後進の指導にあたっているる若きヴァイオリン奏者である。エジンバラ・フェスティバルでヨハン・スヴェンセンの《ロマンス》の演奏でデビューし、その後エリザベス女王ホールでリムスキー＝コルサコフの交響組曲《シェエラザード》を演奏するなど、ヨーロッパやアジア各地でリサイタルをしている。このようにスウェーデンはもとより、中国、ニュージーランド、韓国、ロシア（ペテルスブルグ）でもヴァイオリニスト養成クラスの指導やヴァイオリン教授法に関するセミナーを開催し、2007年にはイギリス王立音楽学校フェロー、また最近アメリカ合衆国のアポジー基金の学術企画アドヴァイザーに任命され、2009年にはニ

ューヨークの新設大学の客員講師を務めた実績がある。

マリアンヌ・ヤコブス JACOBS, Marianne 氏は、来日に際してティチアッティ氏のピアノ伴奏を受け持ったが、日常的にはストックホルムから離れたマルメ音楽院の教授を務め、ヨーロッパピアノ指導者協会スウェーデン支部長もしている。オランダ・ハーグの音楽学校で学んだ後、ブリュッセルとストックホルムの音楽大学に留学し、北欧をはじめヨーロッパ諸国、カナダ、アメリカ、メキシコ、ブラジル、旧ソヴィエト連邦にてコンサートツアーを行い、好評を得ている。また、スウェーデン放送で数々の録音をし、「アーティスト・オブ・ザ・ウィーク」に選ばれたほか、スウェーデン国営テレビで音楽番組のシリーズも担当している。

実は、ティッチアーティ氏はイギリスやカナダを背景とするのに対して、ヤコブス氏はフランス系だと聞いた。また、加勢氏は日本出身のピアニストである。多文化主義国家・スウェーデンでは、このように文化的背景の異なる人々が協同しているのも特徴だという。そもそも、スウェーデン王室の出自がヨーロッパ各国にある。ティッチアーティ氏の演奏の間を挟むかたちで、加勢氏からこうしたスウェーデン文化の特徴と音楽事情について学生に紹介していただいた（写真１）。

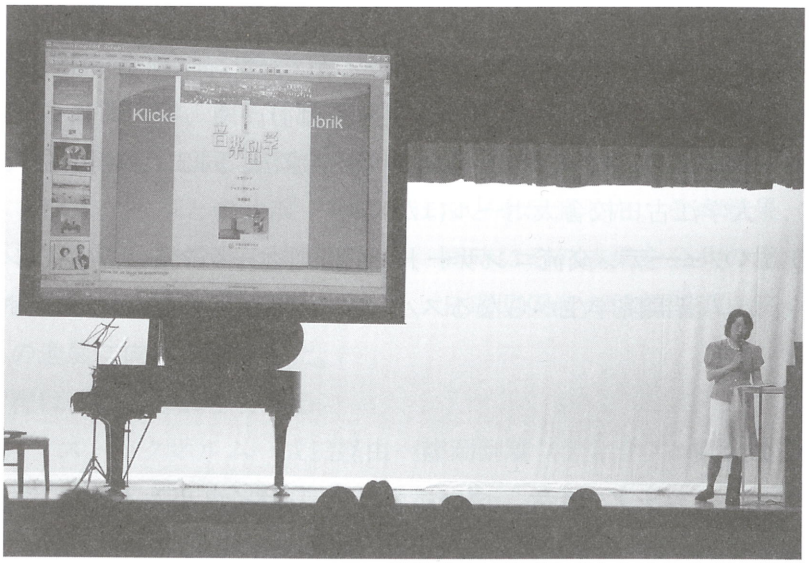

写真１　加勢園子氏によるスウェーデン文化紹介

フーゴ氏らによる演奏曲目についても、スウェーデン文化を反映した作品というよりはいわゆる西洋クラシック音楽の音楽語法に基づく作品である。演奏曲目は、次のようであった（表１）。このうち、２曲目はヤコブス氏の所属するマルメ音楽院作曲家教員マーティンソン氏によるピアノ独奏曲であった。

表１　ヴァイオリン･リサイタル演奏曲目

１．エーミル・シェーグレーン Emil Sjögren
《ソナタ第4番》ホ短調作品47より　第1楽章
２．ロルフ・マーティンソン Rolf Martinsson
《スコルピウス》作品19
３．トール・アウリン Tor Aulin
《2つの水彩画》より「フモレスク」「子守唄」
４．ブー・リンデ Bo Linde
《ソナティナ》　作品15の2
5.ヨハン･ヘルミッヒ･ローマン Johann Helmich Roman
《アッサージョ》第6番ロ短調より第1楽章

写真２　演奏するフーゴ・ティッチアッティ氏

２．２　スウェーデンのFMT脳機能回復促進音楽療法講演会

FMT 脳機能回復促進音楽療法とは、1970 年代にスウェーデンで開発された療法で、セラピスト（ピアノ）とクライアント（打楽器）の 1 対１で展開されるものである。音の振動や打楽器を打つ筋肉神経的な動作を通して脳に刺激を送り、機能回復をはかるものである。講師として招聘したアニータ・グランベルイ GRANBERG, Anita 氏は、ストックホルム王立大学音楽校で Functionally oriented Music Therapy (FMT) 、音楽療法士として初めて音楽教育学の博士号（2004 年、博士論文題目『学校現場における FMT 音楽療法―特別支援を要する生徒への予防的な健康促進作業への可能性と障害』）を取得した。カールスタッド総合大学インゲスウンド音楽大学元講師であり、音楽療法プログラム主任、同大学院FMT 音楽療法修士課程の主導者として活躍し、後進の指導にあたっている。

今回は、パワーポイント資料とビデオによる実践現場の紹介、健常者へのデモンストレーションを行った。スウェーデンでは ADHD など発達支援を要する子どもにも効果をあげ

ていることから、学生ら学内者を始め、近隣の学校施設関係者らも熱心に聴講していた。

写真３　音楽療法デモンストレーション

写真４　熱心に質問する参加者

２．３　静岡大学での事業にあたって

本プロジェクトの事業内容を学生に対するスウェーデン音楽文化の紹介以上にするため、大学院音楽教育研究科 1 年の学生に静岡滞在中のスウェーデン人訪問者の行動予定づくりや送迎、演奏会のプログラム作り、日本音楽の紹介と音楽交流会の企画への関与を依頼した。スウェーデンの音楽作品は、あまり日本では知られていない。曲目がなかなか伝わらない中で、決して多くはない情報（たとえば、戸羽晟 2008『歌の国スウェーデン』 新評論）をもとに、担当学生が作曲家や作品について調べてプログラムに解説を掲載した。7 月 1 日静岡駅での歓迎に際しては、学生がスウェーデン国旗に用いられる紺色と黄色のペンを使った歓迎プレートを作成し、身振り手振りを交えて駅の喫茶店で打ち合わせを行った。

写真３　スウェーデン一行との最初の打ち合わせ

その間、一部の担当学生が大学所有のバスを誘導し、宿泊先であるおしか荘へと案内した。また、事前に用意しておいた近隣の飲食店やコンビニエンスストアの英文マップを手渡し

た。そして、夕食を希望した一部のスウェーデン人演奏者らを近隣のレストランに案内した。

演奏会・講演会当日の７月２日は、大学会館内で練習室の確保、音楽療法講演に使用するドラムセットやパワーポイント提示のためのパソコン等の準備、昼食の確保をしつつ、交流のための箏や三味線の準備を行った。また、演奏会と公演の間の休憩時間には、来場者に対して当日大学会館内で公開されていたキャンパスミュージアム所蔵のガムラン展示の案内も行った。

そもそもピアノや声楽など西洋音楽の演奏を専攻する学生にとって、箏や三味線は異文化の楽器である。今回の歓迎にあたって、学生たちは少し触った程度の箏や三味線をスウェーデン人に紹介するためにそれなりの準備も必要であった。しかし、相手も音楽家であることから手にした邦楽器への反応も早く、興味深く演奏体験していた。また、学生のアイデアでお土産に用意した箏の楽譜を大層喜んで受け取っていた。

写真４　日本の作品をピアノで演奏する

写真５　箏を体験するスウェーデン一行

翌７月２日の昼、神戸市に移動することになっていたが、チェックアウト時間に宿まで迎えに行くとまた騒動が起こっていた。ヴァイオリニストが出発時間まで宿に残って、練習したいというのである。ぎりぎりまで練習に時間を費やしたいという音楽家の心情も理解できるが、宿泊先の規定もある。結局、同じく迎えに来ていた常葉学園大学の松本進氏のご配慮により、ヴァイオリニストは別の練習場所を確保することができた。そして、何とか予定通りに、スウェーデンからの一行は無事に神戸へと向かった。

このように、日本出身の加勢氏が同行していたから意思疎通が出来たところもあったが、学生の協力と機転を利かせた行動がなければ、静岡での公演もスムーズには行かなかった。一方、学生は英語によるコミュニケーション能力アップの必要性を感じつつ、身振り手振りを交えてスウェーデンの演奏家から演奏に関するアドヴァイスを受けたり、情報収集したりする機会となった。そして、これまで縁のなかったスウェーデンへの親しみを感じ、プロジェクトが継続する場合には積極的に関与したいという思いを募らせていた。

３．事業を終えて

過密なスケジュールで国内各地におけるコンサートと講演会を実施したため、出演者、スタッフにとっては気力と体力を要する事業であったが、いずれにおいても来場者には大好評であった。演奏会については、スウェーデンの音楽そのものがこれまであまり紹介されることがなかったため新鮮であったこと、演奏者の技術面や表現上の能力が高かったこと、演奏者の舞台マナーが好感をもてるものであったことが、高い評価につながったと考えられる。たとえば、静岡大学１年生は「その国や地域独自の音楽の面白さの発見」があったことを感想に記している。また、ＦＭＴ音楽療法の実践では、実際に障害を持った方（パーキンソン病や病気や事故の後遺症をもつ方）が自ら舞台に上がって参加し、数分の間に動作の改善が見られたことなどによるインパクトが大きかった。スタッフ（静岡大学学生スタッフも含む）と出演者とのコミュニケーションも十分に行うことができ、相互理解と今後の音楽を通じての日瑞交流の発展に向けてのアイデアを出し合うこともでき、大変有意義であった。

写真６　交流記念